九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ドーデの短篇小説の英語翻訳 ： 『最後の授業』

山根, 祥子

https://doi.org/10.15017/1470354

出版情報：地球社会統合科学研究. 1, pp.81-88, 2014-09-10. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：

『地球社会統合科学研究』創刊号（2014）81～88
Integrated Sciences for Global Society Studies
No.1（2014），pp. 81～88

ドーデの短篇小説の英語翻訳
―『最後の授業』―

山根（ヤマネ）　祥子（ショウコ）

はじめに

アメル先生は、フランス語は世界中でいちばん美しい、いちばんはっきりした、いちばん力強い言葉であることや、ある民族がどれいとなっても、その国語を保っているかぎりは、そのろう獄のかぎを握っているようなものだから、私たちのあいだでフランス語をよく守って、決して忘れてはならないことを話した。(桜田佐訳『月曜物語』岩波文庫、1936年、15頁。)

これはアルフォンス・ドーデの短篇『最後の授業』からの抜粋である。この短篇小説が国語の教材としてだけでなく、その英訳テクストが英語教育の教材としても使用されていたことはあまり知られていない。夏目漱石は蔵書の中の「最後の授業」の頁への書き込みに以下のように記している。

> カツテ、アル読本ヲ校訂シテ非常ナ名文ニ出合ツテ少々驚ロイテ結末ニ至ルトDaudetト署名シテアツタノデ成程ト思ツタ
> 余ガ其時ニ感心シタ文章ハ即チコレデアル
> (夏目金之助『漱石全集　第27巻』岩波書店、1997年、105頁。)

ここでいう「アル読本」とは漱石が夏目金之助名義で校訂をおこなった*New century supplementary readers (2)*を指し、ドーデの短篇が*The story of a little Alsatian*として収録されている。漱石が校訂した読本の英訳テクストは限りなく原文に忠実に翻訳されており、ネイティヴのチェックも入っていると思われる[1]。一方で、同じ短編小説を扱った英訳ながら、その様相が全く異なるテクストも存在する。そこで本稿ではフランス語の原文テクスト(以下、テクスト①)と英語圏でネイティヴによって翻訳された英訳テクスト(以下、テクスト②)と明治期以降の英語教育の教材として使用された漱石校訂の1人称の英訳テクスト(以下、テクスト③)と3人称の英訳テクスト(以下、テクスト④)を比較することによって浮かび上がる問題点について考察したい。次に3人称の英訳テクスト④を基に翻訳されたと思われる鈴木三重吉訳の日本語訳テクストを比較し、それらのテクストから伺える近代日本のイデオロギーについて考察してみたい。

１．英訳教科書テクスト比較

1905 (明治38) 年に刊行された*New century supplementary readers (2)* (テクスト③)と1921(大正10)年に出版された『新英語讀本　11年版4巻』(テクスト④)にはドーデの*La Dernière Classe*が英語教育の教科書教材として英訳されて掲載されている。この二つのテクスト③④はいずれもテクストの末尾に “(Translated) from the French of Alphonse Daudet” とあり、ドーデの原書から英訳されたことが示唆されているが、その中身は対照的なものとなっている。テクスト③はフランス語原文と同様の1人称なのだが、テクスト④は3人称の語りで物語が展開していく。

明治・大正期の英語教育史を踏まえて考察すると、テクスト③④はどちらも池田哲郎氏の言うところの、基となる資料テクストを日本で独自に編集し刊行していた「邦刊本時代」に出版されたものとなる。したがって、原文と全く違う3人称の英訳テクストはもちろんのこと、テクスト③④が舶載本や翻刻本である可能性は低く、日本人による英語の加筆あるいは略筆が行われている可能性がある。

明治・大正期に英訳されたドーデの*La Dernière Classe*のうち、日本に輸入された英訳、あるいは日本で刊行された英訳は、現在筆者が確認しているだけで、教科書テクストとして前出の2点の他、アメリカで1900年に翻訳されたMcintyre版と1903年に翻訳されたとIves版(テクスト②)の翻訳2種が存在する。ドーデのこの短篇小説の英訳が掲載された書籍はいくつか日本にも輸入されているが、明治期の英訳は大抵がこの2訳である。

まず、英訳テクスト②③④とフランス語の原文であるテクスト①を比較してみると、決定的な相違点として主語の違いが挙げられる。テクスト②③は①と同様に1人称の語り手「私」(I)によって物語が語られるのに対し、

テクスト④は3人称で語られ、主人公は“little Franz”と呼ばれる。この“little Franz”はフランス語の原文テクスト内でM. HamelがFranzに呼びかける“Mon petit Franz”が転じたものであろう。後述するが、この“little Franz”が日本語に翻訳され、「小さなフランツ」となり、幼いフランツの挿絵が付けられている。

次にテクストの語彙の翻訳の違いを見ていくと、やはりテクスト④には原文にない付加、変更、省略が行われていることが明確である。その一部を例に挙げてみよう。

①フランス語原文テクスト[2][1人称/Je]	②George Burnham Ives版The last class[3][1人称/I]	③New century supplementary readers (2)[4][1人称/I]	④新英語讀本11年版4巻[5][3人称/Little Franz]
derrière la scierie	**behind the sawmill**	**behind the saw-mill**	**behind the old sawmill**
la grosse règle du maître	**the teacher's stout ruler**	**—**	**the teacher's cane**
la terrible règle en fer	**the terrible iron ruler**	**the terrible iron ruler**	**his dreaded cane**
Mes amis	**My friends**	**My friends**	**My children**

まず一つ目の単語を見てみると、テクスト④だけ、形容詞“old”が加えられていることに気づくだろう。“the sawmill”に“old”をつけることにより、古くからある木挽き工場とその裏で新しくやって来たばかりのプロシア兵が訓練を行うという新旧の対比が生まれる。そして昔からあってこれからも変わらないはずだった当たり前の日常への変化という構図ができる。次に“ruler”と“cane”の違いについて考えたい。フランツら生徒にとっては、アメル先生の厳格さを象徴する恐ろしい道具ではあるが、“ruler”と“cane”ではその形状は全く違う。“ruler”はあくまでも定規であり、先生の必需品と考えてよいだろうが、“cane”では罰を与えることが第一の目的となってしまう。翻訳の過程で、テクスト④の翻訳者の教師に対するバイアスがかかっているようだ。そして“My children”という呼びかけでは、アメル先生と生徒あるいはかつて生徒であった村の人たちとの関係性があくまでも教師と生徒という師弟の間柄に留まり、決して対等になることはない。“Mes amis”や“My friends”では教師と生徒という立場を超え、プロシアに侵略された同じ「アルザス人」という括りとなり、「フランス」[6]対プロシアという構図が確立される。また、アメル先生は物語の初めにおいて生徒たちに対して“Mes enfants”や“My children”と呼び掛けているが、物語の最後では“Mes amis”や“My friends”と呼びかけが変わっている。つまり、テクスト①②③では、教師ではなくなるアメル先生が一人の人間として子どもたちを対等に扱い、彼らのこれからの幸運を祈るような気持ちが一層強調されているのである。

テクスト④では物語空間にも微妙な差異が生じている。例えば、フランツ少年がアメル先生に分詞の質問をされても一つも答えることができないので、叱られるのが怖くて学校へ行くのを嫌がる冒頭の場面ではテクスト④は次のように翻案されている。

Now if you were a French boy like Franz, you would know how hard that rule is and how long you have to study it to really know it, and you wouldn't wonder that Franz wanted to play truant and stay out in the warm sunshine, instead of going indoors to recite a rule that he hadn't studied.(p.135)

一方でテクスト①では1人称の語りの構造を取っており、上記と対応すると思われる箇所は以下のようになっている。

Un moment l'idée me vint de manquer la classe et de prendre ma course à travers champs.
Le temps était si chaud, si clair! (...) Tout cela me tentait bien plus que la règle des participes; mais j'eus la force de résister, et je courus bien vite vers l'école. (p.581)

さらに、テクスト②はテクスト①を忠実に翻訳しているため、次のようになっている。

For a moment I thought of staying away from school and wandering about the fields. It was such a warm, lovely day. (…) All that was much more tempting to me than the rules concerning participles; but I had the strength to resist, and I ran as fast as I could to school. (p.187)

“if you were a French boy like Franz”と語り手が読者に語りかけるテクスト④の仮定法過去の文脈によって、語り手と読者が同じ世界を共有するかのような雰囲気が生まれる。あるいは語り手と読者の世界が近づき、読者はフランツ少年をより身近な存在として感じることができる。

テクスト④は、翻訳というよりは翻案に近いと言えるだろう。1人称から3人称への物語の視点の変更だけで

も、もはや翻訳の域を超えている。3人称での語りの構造による主観性の弱体化と3人称にすることで主人公であるフランツとの距離が縮まったことで、もし自分がフランツだったらと、わが身に置き換えて考えるという教訓的要素の強化により、国家と言語の重要性を説くこの短篇の中心テーマを強調するだけでなく、勤勉を奨励する格好の材料となっている。3人称に変更されたテクストが教科書テクストとして使われたのにはこうした明治以降の「近代」という時代の要請による理由があるのではないだろうか。

テクスト④はドーデの*La Dernière Classe*の中心テーマをなしていると言える国家と言語に関わる問題を解く箇所においても下線部のようなテクスト①にはない付加が行われている。

④ Then, Mr. Hamel talked to them about the French language. He said that it was the most beautiful language in the world, the clearest, the most reasonable, the most musical, and that they must try very hard to keep it, and never to forget it ; for as long as a people keeps its language it can never be hopelessly conquered.
"A language," he said, " is the key of one's prison."(p.140)

このように原文にはないフランス語を「音楽的」と捉える表現が付け加えられており、フランス語に対する矜持がより一層強調されている。しかもこのコンテクストの流れは翻案的な要素が目立つ箇所である。一方、フランス語について熱く語るアメル先生の描写においては、テクスト④は原文のテクスト①の下線部に当たる箇所が省略されている。

①(...)je remarquai que notre maître avait sa belle redingote verte, son jabot plissé fin et *la calotte de soie noire brodée qu' il ne mettait que les jours d' inspection ou de distribution de prix.* (p.582)
② did I notice that our teacher had on his handsome blue coatvii, his plaited ruff, and the black silk embroidered breeches, which he wore only on days of inspection or of distribution of prizes. (p.189)
③ I noticed that our teacher wore his beautiful green coat, his fine plaited frill, and the embroidered black silk skull-cap which he put on only on examination days and when prizes were to be awarded. (pp.67- 68)
④(…)he noticed that the teacher had on his best green coat and his fine lace jabot, which he never wore except on holidays and Sundays. (p.137)

こうした服装の省略は挿絵にも現れている。実際に英語のテクストではないものの、以降日本で出版された大半の子ども向けの日本語テクストに差し込まれたアメル先生の挿絵にはかなりの違いが見られる。翻訳による差異に加え、時にはイメージだけが先行し、全く別のアメル先生像を生みだすこともある。先に指摘したフランツに関しても、6，7歳と思われる挿絵から14，5歳と思われる挿絵まであり、その姿は様々なものである。児童向け図書や雑誌において、翻訳に挿絵が組み込まれる場合、大抵は作家≠翻訳家≠挿絵画家であり、そこに描かれるアメル先生やフランツといった主要登場人物が伝言ゲームのように変化している様が見て取れ、非常に興味深い[8]。

2．英訳教科書テクストのからの翻訳の可能性

3人称の英訳テクスト④が掲載されている『新英語讀本　11年版4巻』が出版された1921年を基準に日本語に翻訳された作品に目を向けると、同じように3人称に翻案されたものがある。鈴木三重吉が1923(大正12)年に『赤い鳥』に発表した「最後の課業」がそれである。以降30人以上の翻訳家の手によって翻訳されたその他の『最後の授業』の日本語翻訳においても、3人称のスタイルを取るものは見当たらない。鈴木三重吉がどのテクストを底本にしたかは明らかになってはいないが、先に挙げた3人称の英訳が鈴木三重吉訳の底本となった可能性は十分にある。そこでその『新英語讀本　11年版4巻』と鈴木三重吉訳テクストを比較検討してみたい。フランス語の原文と比較した際、鈴木三重吉訳の「最後の課業」の特徴として次の2点が目に留まる。まず一つ目はフランス語の原文テクストとの語彙の明らかな違い、そして修身的要素の添加である。語彙の違いに関しては先に比べた英訳テクストでも④の『新英語讀本　11年版4巻』だけが著しく手が加わっていたことは既に述べた。鈴木三重吉の「最後の課業」はその語彙や表現をかなり踏襲している。

『新英語讀本　11年版4巻』	鈴木三重吉「最後の課業」[9]
Little Franz	小さなフランツ
behind the old sawmill	材木をひく、古い水車場のうしろ
the teacher's cane	先生がむちでぱちぱちたゝいて
He said that it was the most beautiful language in the world, the clearest, the most reasonable, the most musical, (…)	フランス語がどんなにうつくしい言葉で、そして、どんなに、はっきりしてをり、その上どんなに音楽的であるか（後略）

こうした語彙や表現の一致を鑑みれば、英語の教師経験もあった鈴木三重吉の翻訳の底本は『新英語讀本　11年版4巻』あるいはその英文テクストと同じものが掲載されている英訳テクストであった可能性が高い。しかし、それと同時に『新英語讀本　11年版4巻』の3人称英訳テクストには見られず、フランス語の原文には見られる場面の挿入もあることから三重吉訳の底本が1冊だけではないことが推察できる。可能性として次の2点が考えられる。一つは他の1人称の英文のテクストも併用していた可能性であり、もう一つは既に日本語に翻訳されたテクストを参考にした可能性である。三重吉の翻案が掲載される以前に日本語に翻訳された*La Dernière Classe*は筆者が確認しただけでも次の6点が挙げられる。

- ·1902年　明治35年3月　羝夢生·紅葉山人「をさな心」『新小説』
- ·1904年5月8日　天絃「最終のお稽古」『読売新聞』
- ·1914年　大正3年　後藤末雄『普佛戦話』「最後の授業」新潮文庫第11編、新潮社
- ·1915年　大正4年　菊池幽芳『幽芳集』大正名著文庫第18編、至誠堂書店
- ·1917年　大正6年　藤波水處『東亜の光第12巻第7號』「最後の授業―ドォデ―」東亜教会
- ·1918年　大正7年　菊池幽芳「最後の授業」『帝国読本巻2』富山房、(『幽芳集』からの翻案)

これらのテクストの内いくつかは鈴木三重吉の目に触れる機会もあったことだろう。いずれにせよ、鈴木三重吉はテクストに更なる加筆を行い、独自の「最後の課業」を翻案していったのには違いない。そして、三重吉のテクストの一番の特性は子ども向けに書かれたテクストであるということだろう。上記に挙げた、羝夢生·紅葉山人版は『新小説』に、天絃版は『読売新聞』に掲載されていることから、三重吉版とはその読者層となるターゲットが異なる。

ドーデがこの短篇を新聞に掲載した際に、想定された読者はあくまでもパリの大人であった。それが時と国を越え、読者層までもが変わり、読まれていく。鈴木三重吉のテクストは三重吉自身が「ドーデー以下の諸作は、もともと童話として作られた作篇ではありませんが、童話としてとり入れても恰好な、純情的な短篇なので、少年少女諸君のために再話したものなのです。」[10]と述べているように、翻訳ではなく「再話」であり、これは完全なる翻案と言えるだろう。裏を返せば、このようなテクストに見られる添加や省略が、再話のための加筆·略筆であるとすると、そこには時代のイデオロギーが表れているのではないだろうか。三重吉が「少年少女諸君のために」「純情的」なドーデの短篇を翻訳する際にそこに加えられた教訓的パースペクティブは従来の幼年期の教育に一石を投じたとも言えよう。

3．結論に代えて

―英訳テクストと近代日本のイデオロギー―

幕末以降、急速な近代化を図る必要があった日本は英語教育を急務と考え、高等教育機関創設を始めとして、英語教育に力を入れていく。明治17(1884)年には入門英語とも言える英語が小学校の教科として加わることとなる。それに比例するかのごとく、辞書や教科書を始めとする英語の研究はいっそう盛んになり、大量輸入、翻刻、刊行により英語関連の書籍はあっと言う間に氾濫する。川戸道昭氏が「今に残る夥しい数の英語副読本を総合すると当時の若者を取り巻く文学·思想上の環境の概略が見えてくる、といっても決して過言ではないほど、当時のそれらの書物は、求道心、向上心に燃える若者の精神上の渇きを満たす一大源泉となっていた」[11]と指摘するように、それらのテクストは単なる語学習得のためのツールではなく、叡智を磨くためのものでもあった。英語翻訳を用いる意図は日本語翻訳の場合と幾分か異なり、英語という外国語学習のためというのが随一の目的となるものの、当時の英語教育は語学習得だけでなく、西洋の知識や思想を吸収する場でもあった。

やがて、そうして吸収された新しい西洋の思想はアウト·プットとして日本語に翻訳·翻案されていくことで、日本人にも広く柔軟に受け入れられて行くこととなる。とりわけ愛国心と母国語愛を中心テーマとする*La Dernière Classe*はドーデの真意や物語の背景が十分に理解されたと言えないにしても、愛国心と母国語愛を教えるのに格好の教材として日本の教育界に長い間鎮座していた。多くの翻訳家や挿絵画家の手によって作り出されたドーデの『最後の授業』は、作家のイマージュまで取り込み、戦後まで続く「母国語神話」とでもいう集団表象となっていった。

---

[1] 英訳テクストが誰の手によるものなのかははっきりとしないが、日本人の手による可能性も否定できない。例えば、本論中にも引用したアメル先生の服装の描写に関して "I noticed that our teacher wore his beautiful green coat, his fine plaited frill, and the embroidered black silk skull-cap which he put on only *on examination days and when prizes were to be awarded*." とあるが、下線部のように副詞句と副詞節となっており "(…)which he wore only on days *of inspection* or *of distribution of prizes*."

となっているGeorge Burnham Ives版(後出のテキスト②)のようなきれいな一致はない。

[2] Daudet. Alphonse, *Œuvres I*, Ed. Gallimard, 1986

[3] Ives. George Burnhum, *Alphonse Daudet x x iv*, 1903

[4] 夏目金之助校訂、*New century supplementary readers (2)*、開成館、1905年。

[5] 英語教授研究會『新英語讀本11年版4巻』六盟館、1921年。

[6] 蓮實重彦氏や田中克彦氏に指摘されるように、La dernière classeの舞台、アルザスでは普仏戦争当時、日常的に話されている言葉はフランス語ではなく、フランス語は学校で習う言語であった。原文でアメル先生の "vous ne savez ni parler ni écrire votre langue!" という台詞が多くの日本語訳では原文の「話すことも書くことも出来ない」ではなく「読むことも書くこともできない」となっており、フランス語を話すことが出来ないというアルザスの現状を理解していないまま間違った形での翻訳が広まった。

[7] テクスト②は "blue coat" となっているが、原文は "verte" =「緑」となっている。テクスト②と同じくアメリカで1900年に出版されたMarian Mcintyre訳版では "green frock-coat" となっている。この緑と青の色の訳を巡っては、英語訳版だけでなく日本語訳版にもみられる問題であり、緑と青の色の境界線がはっきりしていないことの影響もあるのではないかと思われる。

[8] 挿絵に描かれたフランツとアメル先生

天絃訳「最終のお稽古」の挿絵（1904(明治27)年5月8日讀賣新聞）

「Lesson ＸＸⅢ The last lesson in French」の挿絵(英語教授研究會『新英語讀本　11年版4巻』、1921年)

藤森淳三「童話　最後の授業」の挿絵（『女性』昭和2年9月号）

桜田佐「さいごの授業」の挿絵（『少年少女世界名作選17　月曜物語』偕成社、1967年）

松田穣による南本史訳「最後の授業」の挿絵（『少年少女世界文学全集7　アルプスの少女　最後の授業』学習研究社、1968年）

[9] 鈴木三重吉『鈴木三重吉童話全集　第5巻』文泉堂書店、1975年。

[10] 同上、462頁。

[11] 川戸道昭「明治時代の英語副読本(Ⅰ)」『英学史研究(27)』日本英学史学会、1994年、89頁。

A Comparison of Three English Translations of Daudet's *La Dernière Classe*

Shoko Yamane

Daudet's short story *La Dernière Classe* first appeared in Japanese textbooks in 1927. However, this story had already been used to study English earlier than this. According to Natsume Sōseki's comment in his library, some English translations of Daudet's *La Dernière Classe* were used as teacrials for teaching to lish in the Meiji period.

Besides the two faithful translations, there is a translation which had been grammatically reworked using the third person. I consider this modification to be intentional.

This paper compares the three aforementioned English translations of *La Dernière Classe* and the original text in French. The texts below were used for the examination:

Text 1: DAUDET. Alphonse, *La Dernière Classe*, *Œuvres* I , Ed.Gallimard, 1986.

Text 2: IVES. George Burnham, *The Last Class - The Story of a Little Alsatian, Alphonse DAUDET xxiv,* 1903.

Text 3: NATSUME. Kinnosuke, *A Story of a Little Alsatian, New Century Supplementary Readers (2),* Kaiseikan, 1905.

Text 4: Eigokyoujyukennkyukai, *The Last Lesson in French, Shin Eigo Tokuhon version, 11th year, vol.4,* Rokumeikan, 1921.

In addition, the paper also examines the Japanese translation for children, written in the third person by Miekichi Suzuki, analyzing it from in relation to e the Japanese ideology. The story's collective representation was used to encourage the idea of nationalism regarding the mother tongue and diligence in childhood.